

第8章 ヌクアロファ都市空間の変貌 ポートタウンの形成を焦点として

著者	大谷 裕文
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	511
雑誌名	都市の誕生 : 太平洋島嶼諸国の都市化と社会変容
ページ	319-356
発行年	2000
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00012389

第8章

ヌクアロファ都市空間の変貌

—— ポートタウンの形成を焦点として ——

はじめに

太平洋の島嶼社会の大多数は、19世紀に世界資本主義経済の周辺において生起する歴史過程に巻き込まれ、西洋文化との絡み合いの中で植民地状況の経験を余儀なくされてきた。この植民地状況は、西洋列強と太平洋島嶼社会の間の圧倒的な力関係の落差によって特徴づけられた特異で抑圧的な異文化接触の状況であった。しかしながら、太平洋島嶼社会の人々の多くは、植民地状況の中で「伝統文化」の一方的な衰退を受動的に甘受していたわけではない。事実はむしろ逆であり、島嶼社会に生きる人々は、多くの場合、強力な外圧の中で可能な限りの主体的な選択を行い、徐々に在来文化の再構成と新文化の生成を実現していったのである。このような歴史過程（在来文化の再構成と新文化の生成）を通して現れた出来事の典型が、太平洋島嶼社会におけるポートタウンの形成と発展である。太平洋島嶼社会のポートタウンは、植民地状況という特異な異文化接触の歴史過程の所産であり、土着の在来文化と西洋文化の絡み合いが凝縮された形で現れる特別な空間なのである。

本章は、以上のような視点から、トンガ王国の首都でありかつポートタウンであるヌクアロファの都市空間の変貌を、その実効的な用在性（教化、統治、交易など）と客体化された表象（象徴的中心性など）の二つの次元において、18世紀末から20世紀初めに至るまで、歴史人類学的に記述・分析するこ

とをその目的とする。

第1節 太平洋島嶼社会の都市研究

1. 孤立性・閉鎖性イメージの廃棄と都市研究

現在私達が太平洋島嶼社会で目にする現実は、「世界システム」の中で翻弄される小国家の苦悩であり、開発政策・マンパワー政策によって急速に近代化される村落生活であり、村から都市への継続的な国内移住であり、さらに故国を離れてニュージーランド、オーストラリア、アメリカ合衆国等々に移住する人々の波である。

こういった太平洋島嶼社会の高い移動性は、グローバリゼーション時代の今日、突然出現したものではなく、太平洋の島々に生きる人々が、島嶼間の広大な海をダブルカヌーで自由に移動していた時代にもうかがうことのできる在来文化の基本的な属性である。それにもかかわらず、太平洋の島嶼社会は、マリノフスキーの民族誌の成功以来長らく、文字どおり「大海に浮かぶ」孤立した閉鎖的かつ自足的な小世界のイメージ（「絶海の孤島」イメージ）で捉えられることが多かった。その背景には、太平洋島嶼社会の人々が、19世紀に、欧米列強による分割によって確定された境界の内側に閉じこめられ、この人為的な境界の拘束性のもとで内向きの思考を強いられていったという対象社会の側の事情も作用していたと思われる。こういった状況の中で、研究者のまなざしは、必然的に、西洋文化の外的影響を免れた「純粹文化」が生きている世界＝村落の小世界に向けられていったので、西洋文化の外的影響と在来の社会・文化構造の相互作用によって可視的な変化が進行する都市世界は、研究対象として意図的に排除される傾向が支配的であった。太平洋島嶼社会において都市への人口集中や海外への出稼ぎが顕著になった1960年代初頭以降においても、孤立性・閉鎖性・自足性は暗黙の前提として存続

していったと言えるであろう。というのは、この時期に、オセアニアに関する文化人類学および社会人類学的な研究の主要な関心は儀礼、神話、世界観、カテゴリー体系、婚姻連帯などに移行していったが、孤立性・閉鎖性・自足性の前提は、変化を免れた「構造」を抽出しようとするこれらの研究にとって好都合であったからである。このようなオセアニア人類学の傾向性は、1980年代に入ってから基本的には変化することはなかった。1989年に出版された、この地域を対象とする文化人類学の基本的なテーマに関する回顧と展望をまとめた論文集、『ポリネシア民族学の展開』(*Developments in Polynesian Ethnology*)も、主要な研究テーマとして、先史考古学、社会組織、社会化と人格形成、マナとタブー、首長制、芸術と美学、初期接触状況などを挙げているだけであり、社会文化変化については僅かな言及が行われているのみで、都市研究に関しては殆ど何も述べられていないといった具合である。

とはいえ、社会・文化変化および都市世界が抱える諸問題を意図的に取り除いていく「絶海の孤島」イメージが、太平洋島嶼社会に関するこれまでの民族誌の全てに浸透していたというわけではない。アメリカ合衆国において異文化接触に起因する文化変容に対する関心が芽生え始めた1920年代前半には早くも、カリフォルニア大学の民族学者、E・W・ギフォード(E. W. Gifford)が、トンガの都市部とそれを取り囲む農村部において外世界のインパクトを受けて進行していた文化変容を、調査資料に基づいて記述した先駆的な論考、“Euro-American Acculturation in Tonga”を1924年に発表している。文化変容や社会変化といった問題への関心が再び高まっていった1950年代初頭から1960年代初頭にかけて、一時的に、太平洋島嶼社会に対する西洋文化のインパクトを主題とする研究が次から次へと出版されたこともある。D・L・オリバーの*The Pacific Islands* (1951年)、W・E・H・スタナーの*The South Seas in Transition* (1953年)、E・ビーグルホルムの*Social Change in the South Pacific* (1957年)などはその代表である。また、マリノフスキーの高弟であることを自他ともに認め、著名な古典 *We, The Ti-*

kopia の中でティコピア島の孤立性・閉鎖性・自足的安定性を丹念に描き出した R・ファース自身も、この時期に、西洋文化のティコピア島への影響を詳細に述べた民族誌 *Social Change in Tikopia* (1959年) を公刊している。さらに、太平洋島嶼社会におけるポートタウンとヒンターランドの結びつきを、外部の巨大な「メトロポリタン・パワー」との関係という視座で論じた A・スポアーの “Port Town and Hinterland in the Pacific Islands” は、今日では忘れ去られているが、太平洋島嶼社会の都市を見る基本的かつ動態的な視点を文化人類学の立場から打ち出したという意味で画期的な論文であった。以上の諸研究は、時代の制約もあって、文化変化・文化変容という歴史過程を、もっぱら衰退し失われていく伝統文化への郷愁という見方から論じていること、外的影響を天災のような不可避の物理的インパクトとして捉え、植民地化する勢力と植民地化される島嶼社会の間の圧倒的な力の落差がもたらした植民地状況の悲惨に対する反省的認識が希薄であること等々、の限界を持っている。しかしながら、そこに述べられている、個々の変化に関する豊富な事実と解釈は今日の「史料批判」的な読みにとって極めて有意義であり、そのような意味において、これらの研究は継承に値する貴重な遺産であると言えよう。こういった遺産に加えて、1980年代には、少数ではあるが、1990年代の主要な研究関心（「近代世界システム」の周辺で生起した植民地状況の展開と太平洋島嶼世界の政治・経済・文化変化の関係等々）に結びつき、かつ太平洋島嶼社会の都市の研究にも極めて重要な示唆を与えてくれる著作が出版されるようになった。例えば、グREG・デニングの *Islands and Beaches* (1980年)、クリスティーヌ・ゲイリーの *Kinship to Kingship* (1987年)、ニコラス・トーマスの “Social and Cultural Dynamics in Early Marquesan History” (1986年) および *Out of Time: History and Evolution in Anthropological Discourse* (1989年) などである。太平洋島嶼社会の都市に関する文化人類学的な研究は、今日においても、それほど活発であるとは言えないが、このような状況の中で、我々が、孤立性・閉鎖性イメージを乗り越えて太平洋島嶼社会の都市の研究を行う場合、これらの先駆的な試みを積極的に

発展させていく必要があるであろう。

2. ポートタウン

都市は複雑な社会・文化的な事象であるので、都市が何であるのかを一義的に論決することは困難である。したがってここでは、太平洋島嶼社会の都市を念頭において、都市と非都市を区別する暫定的な基準を示しておくことにしたい。アメリカ都市社会学の先駆者、ワース以来、都市を人口の集中・凝集性で捉えようとする様々な試みが続けられてきたが、都市と非都市の区別を行おうとする場合、やはりこの人口の集中・凝集性という基準を外すことはできないであろう。太平洋島嶼社会の都市に関しては、S. P. C. によって「人口1000人以上の集落を都市とする」という共通見解が1970年に出されているが (McCreary [1977] p.12), その後の人口増加や人口移動を考慮するならば、今日この基準にとらわれることは現実的ではないであろう。各島嶼社会の特殊個別的なコンテクストに基づいて、周辺の地域よりも非常に顕著な人口の集中・凝集性が見られる集落を都市と規定すればよいのではないかと考える。しかし、太平洋島嶼社会における都市と非都市の区別を行う場合、この基準だけではまだ不十分である。太平洋島嶼社会の伝統的な生業形態 (サブシステム・エコノミー) に着目するならば、非農業・非漁業人口が相対的に多い集落というもう一つの基準を用意しなければならないであろう。

これらの基準によって、一応都市と非都市の区別は可能であると考えが、そのような試みはまだ形態的な区別のレベルにとどまっている。太平洋島嶼社会の都市を質的に把握するためには、都市の用在性 (より大きな社会・政治・経済システムの結節点としての都市が果たす役割) と、外的影響との絡み合いの中で絶えず再生産・再創造されていった都市についての客体化された表象 (中心性・超越性・無秩序等々) の双方を植民地状況の歴史過程に基づいて理解する必要がある。というのは、太平洋島嶼社会の都市には、その成立の経緯から布教拠点型 (クック諸島のアヴァルアやトンガのヌクアロファ)、植

民地行政中枢型（パプアニューギニアのポートモレスビー等々）、貿易港型（フィジーのスバ等々）などの違いを見いだすことができるのであるが、これらの都市は何れも近代世界システムの周辺で生起した植民地状況という歴史過程の所産であり、したがってその歴史もかなり浅いという共通の特性をもっているからである。

とりわけ、ポートタウン（パプアニューギニアのポートモレスビー、フィジーのスバ、サモアのアピア、トンガのヌクアロファなど太平洋島嶼国の主要なキャピタルは殆どそこに包摂される）は、植民地状況の展開とダイレクトに絡み合ってきた特別な空間である。太平洋の島嶼社会は、19世紀に、欧米列強による帝国主義的な分割によって確定された境界の内側に囲い込まれ、それ以後こういった境界の内側で、他の属領から相対的に隔離されながら、トラウマを伴う被植民地化の経験を余儀なくされていった。このような恣意的な境界の拘束作用の中で、あるいは複数の属領を包摂するサブリージョンの枠内で、外部の巨大な近代世界システム内のフォワランド（foreland）と内部のヒンターランド（hinterland）を、情報伝達・統治行政・経済取引などの用在性や客体化された都市表象を通して媒介する、大きな臨海結節点がポートタウンである（Spoehr [1960] pp.587-588を参照）。こういったポートタウンの創出・発展・変質の過程を具体的に提示するために、次に、年代を遠く遡ってトンガにおける散村形態からポートタウンの形成・発展に至る歴史を検討することにした。

第2節 ラパハ：ヌクアロファに先行する原初国家の中心

1. ラパハと散村形態

トンガタブ島の考古学的な調査を積極的に進めてきたデンマークの考古学者、J・プールセンによると、最初にトンガタブ島にやってきたラピタ人は、

海辺、とりわけ首都ヌクアロファの南側に広がる波の静かなラグーン沿いに集村をつくって定着した。それからおよそ1500年間、トンガのラピタ人は、海辺の集村で貝の採取を中心とする漁労に従事し、副次的に農業と家畜（鶏と豚）の飼育を営む生活を続けた。彼らはまた独自の文様を施した土器（ラピタ式土器）を製作したが、これらは主に貝を調理するために使用されたと考えられている（Poulsen [1987] pp.252-253）。しかし、ラピタ文化後期の貝塚では、貝のサイズが小さくなり、さらに紀元前1世紀以後の地層からは、土器製作の痕跡も認められなくなる。このような実証的な根拠に基づいて、プールセンは、社会規模の拡大に伴う人口圧の増大によって徐々に生業経済のバランスが変化し、それがやがて一連の社会変化、すなわち海辺から陸側への人口移動、集村形態から散村形態への転換、海に依存する生活から農業に依存する生活への転換に結びついていったという仮説を提示している（Poulsen [1987] p.254）。

以上のように形成された散村形態は、基本的には、ヨーロッパ人との持続的な接触が始まる18世紀末から19世紀初頭の時期まで存続したと考えられる。この点は、1773年にトンガを訪れたキャプテン・クックの「ここには、町も村落も見られない、家屋の大部分は必要性に応じてプランテーションの中に建てられている」という記述からもうかがえる（Cook [1777] p.213）。また、1793年にトンガタブ島に上陸したフランス人ラビリヤルディエールも、「我々は、すぐに耕作地にたどり着いた、そこでは、個人の屋敷地が柵で小さく区画されている、耕作状態はすばらしい」と述べている（Labillardiere [1802] pp.135-136）。こういった記述から、18世紀末のトンガにおいて、散村形態が支配的であったことはほぼ間違いのないところであろう。しかし、クックは、神なる王トゥイ・トンガの館があったラパハ（現在のムア）だけは例外的に大きな建物が並ぶ「村」であったことを次のように描写している（Cook [1784] Vol.1, p.282）。

「我々が行ったその場所は、入江に良い感じで面している村であった。

そこには、全ての、あるいは大多数のこの島の重要な人物が住んでいる。

各人が屋敷地の真ん中に家を建てており、従者のための小さな家や仕事場もそこにある。これらの屋敷地はきっちりとその回りを柵で囲まれており、大抵ただ一つの入口しかない。屋敷地の境界には公の道路か小道が走っており、お互いに屋敷地の中を横切るとはしない。……公の道路の近くにはかなり大きな家が建っており、その前は広くなだらかな草地で、全体が柵で囲まれている。聞くところによると、この建物は王のものだという。

おそらく、それは公的な集会が開かれる場なのであろう。」

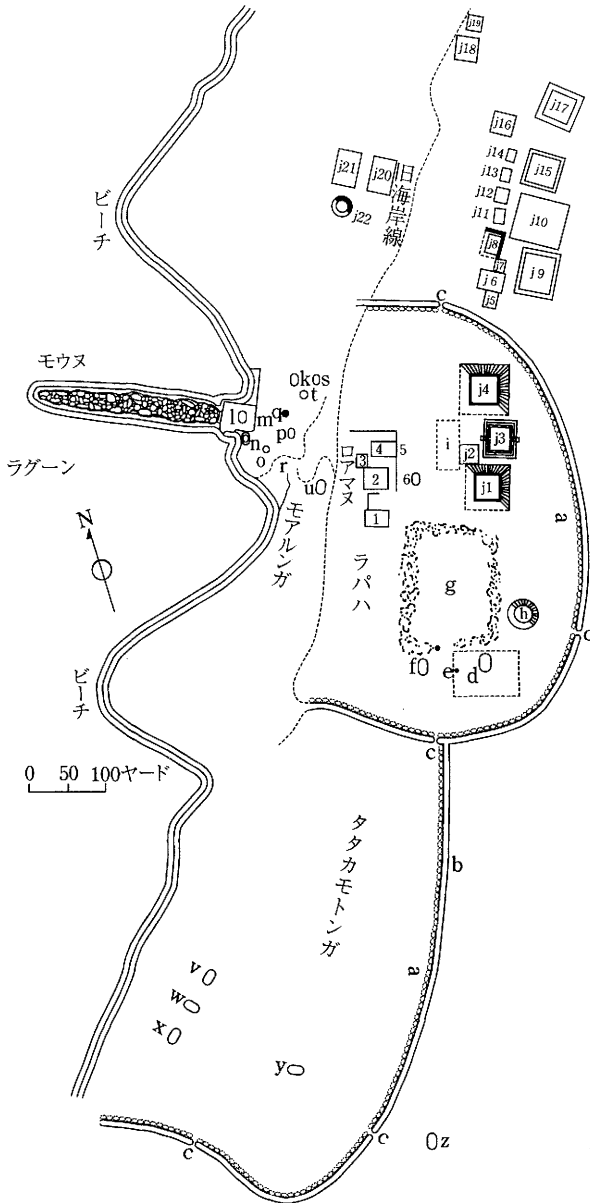
以上のような記述から、農地と小さな家屋が散開するトンガタブ島の全体的な景観のなかに、回りを柵で囲い込まれた唯一の特異な凝集的空間としてラパハが存立していた光景を思い浮かべることができる。こういったラパハの視覚的な中心性は、また18世紀の初期国家の社会・文化秩序におけるラパハの中心性とも符合していた。

2. 集落としてのラパハの構造と用在性

伝承によれば、神なる王トゥイ・トンガは、かつて儀礼的な王であるのみならず、世俗的な王として政治・軍事にも携わっていたので、トゥイ・トンガの居所があったラパハの空間は、初期国家の政治システムの機能的中心であり、同時に最も盛大で最も威信に満ちたイナシの祭礼が執り行われる場所という意味で象徴的な中心でもあった。しかしその後、トゥイ・トンガの支配は、政治的、軍事的に台頭してきた首長、モウンガモトゥアによって脅かされ、最終的にはトゥイ・トンガの正当な政治的権威は、モウンガモトゥアによって篡奪された⁽¹⁾ (Campbell [1992] pp.6-13)。その結果、モウンガモトゥアは、新たにトゥイ・ハータカラウア (Tui Haa Takalaua) 王朝を開いて政治・軍事的任務を遂行し、トゥイ・トンガの方は専ら儀礼を執行する役割を担うことになった (Campbell [1992] pp.55-56)。伝承は、このようにカウハラウタ (Kauhala'uta <陸側の王>) と呼ばれる神聖王とカウハララロ (Kauhalalalo <海側の王>) と呼ばれる世俗王の相補的対立からなる二重王権

制の成立を説明している。1643年、オランダ人探検家タスマンがトンガタブ島を訪れたが、その時は第31代のカウウルフォヌア3世（トゥイ・トンガ＝カウハラウタ）と7代のフォトフィリ（トゥイ・ハータカラウア＝カウハララロ）の治世であり、既に二重王権制は安定した段階に入っていたと思われる（Gifford [1924] p.57）。さらにその後（18世紀初頭）、トゥイ・ハータカラウアの出自集団から派生した地方首長ンガタ（Ngata）の系譜が権力闘争に勝利し、政治・軍事上の実権を掌握した。その結果、トゥイ・ハータカラウア王朝は急速に没落し、ンガタを始祖とする新王朝トゥイ・カノクポル（現在の王家の系譜）が、次第にカウハララロのカテゴリーと同一視されるようになり（Campbell [1992] p.36）、トゥイ・トンガ＝カウハラウタとトゥイ・カノクポル＝カウハララロの相補的な対立が現れるようになったが、二重王権制の構造それ自体には変化が生じなかったと考えられる。以上のような二重王権制の構造は、ラパハという中心的な集落の実効的用在性および空間の象徴的構造と密接に関係している。都市・非都市の基本的な分類基準である人口の量的集中性および凝集性という観点から見ると、18世紀末のラパハでは数百名程度の人口がかなりゆったりとした空間の中で生活していたと思われるので⁽²⁾、これを都市と呼ぶことはできないであろう。しかしながら、当時のトンガの経済的基礎であった農業活動や漁労に直接的に従事しない支配者、その従者、祭司が人口の大多数を占めていたという意味では、ラパハは都市的であった。また、ラパハはその政治的中枢機能という点においても、都市的であった。宗教的世界観に基づいたカウハラウタ（トゥイ・トンガ）の神聖性が、カウハララロ（トゥイ・ハータカラウア）の実効的支配の根拠を提供し、カウハララロの政治力がカウハラウタの安定性を保証するという二重王権制のもとで、カウハララロは、ラパハを中心とする統治組織に依拠して散開するフォヌア（領土）を軍事적および行政的に統制する役割を遂行していったからである。さらに、集落の客体化された空間表象という点においては、ラパハはより一層都市的であった。トゥイ・トンガは、季節の順調な推移と大地の豊饒性を守護する、この世界の秩序の中心と考えられていたの

図1 ラパハの空間分割図



ラパハ・エリア

- | | |
|------------------------|---------------------|
| a 要塞の壁 | f カウタイの家 |
| b 環濠 | g トゥイ・トンガのマラエ |
| c 門 | h タクイラウの塚 |
| d オロテレ (トゥイ・トンガの屋敷地と館) | i ファナカヴァのマラエ |
| e トコマトゥパ (石柱) | j 1~j 22 トゥイ・トンガの陵墓 |

モアルンガ・エリア

- | | |
|------------------------------------|-----------------------|
| k フォヌアモトゥ (トゥイ・ハータカラウアの館) | p ファレキリと呼ばれていた家屋 |
| l ヌクカウシアラ (トゥイ・ハータカラウアの妻たちの居所の盛り土) | q 井戸 |
| m トゥイ・ハータカラウアのファレシニフ (妻たちの居所) | r ヴァカニウア (投錨地) |
| n 諸首長の共住家屋 | s トックモトファ (従者ラウアキの家屋) |
| o トゥイ・ハータカラウアの妻たちの墓所 | t マラマ (浴場) |
| | u ミロと呼ばれていた家屋 |

ロアマヌ・エリア (トゥイ・ハータカラウアの陵墓)

- | | |
|-------------|----------|
| 1 ファレプレマアロ | 4 ルアニの墓所 |
| 2 ロアマヌ | 5 石の壁 |
| 3 フェレトウイパパイ | 6 墓守の家 |

タカモトンガ・エリア

- | | |
|-----------------|----------------------------|
| v トゥイ・カノクボルの館 | y ファレハウ (トゥイ・カノクボルの政庁・接客所) |
| w アヴァウイ (祭司の居所) | z キキロイ (祠) |
| x マタンギブオマイの家 | |

(出所) McKern [1929] pp.94-95.

で、トゥイ・トンガが居住するラパハという集落もまたトンガの他の空間領域の上に聳える超越的で神聖 (タブ) な空間として表象されていた。

こういったラパハの超越性・神聖性は、トゥイ・トンガが世界の秩序を更新するために遂行していた全島のイナシ儀礼 (豊饒の女神ヒクリオへの初収穫物の供犠) の具体的なコンテキストの中に認めることができる。超越的で神聖 (タブ) なラパハ内部の建物や道路の配置にも、カウハラウタとカウハララロの象徴的な対立が表れていたという伝承が今なお語り継がれているが⁽³⁾、こういった象徴的対立のマテリアルな表現は、アメリカの考古学者マッカーンが1920年から1921年にかけての調査に基づいて書き残してくれてい

るラパハの古い空間分割構造図の中に具体的に読み取ることができる (McKern [1929] p.95)。この図には、カウハララロ (トゥイ・ハータカラウア) の墓地が境界となって、境界の北側 (海側) にカウハララロの屋敷地が位置し、南側にカウハラウタ (トゥイ・トンガ) の屋敷地が、さらにその南西のタタカモトンガ地区にはトゥイ・カノクポル (現国王の系譜, 18世紀初頭には新興の荒ぶる政治権力であったが, 18世紀半ば以降はカウハララロと同一視されるようになる) の屋敷地が位置していたことがよく描かれている (図1参照)。このようなラパハの空間構造が, 19世紀前半の内乱と西洋文化のインパクトに起因する広義の植民地状況 (貨幣経済の浸入とキリスト教による教化) の中で, 消滅してしまったのか, あるいは部分的に変容していったのか, という問題は, 今後更に検討していかなければならない重要な課題であるが, 現在のところ, 筆者は, 新たなキャピタル=ヌクアロファの創出過程で, この古い超越性を帯びた空間構造は西洋の都市文化の表象と絡み合いながら, 部分的に再生産されていったと考えている。

第3節 ヌクアロファの起源

1. 内乱と要塞化

現在のヌクアロファは, 18世紀末に勃発した内乱の過程の中で構築された要塞にその起源をもっている。そこで次に, 内乱の勃発と要塞構築の経緯について述べてみよう。

1799年, その後約半世紀も続く政治的無秩序状態の引き金となる出来事が起こった。ハーパイ諸島の有力首長フィナウが, 彼の兄弟, トゥポニウアの協力を得て秘かにトンガタプのラパハへ行き, イナシ儀礼の夜にトゥイ・カノクポルの王位にあったトゥクアホを暗殺したのである。この事件を契機として, 初期国家を支えていた二重王権制が崩壊し, 以後政治的野心を抱く諸

首長の乱立状態が現れる。諸首長の当面の政治的野心は、伝統的な貢納システムの再編を通して自己の支配を拡大することに向けられていた (Gailey [1987] p.178)。最も野心的なフィナウは、1799年、トゥイ・カノクポル暗殺に続いて、トンガタブ島ヒヒフォ地区の首長を急襲した。当時、1797年に来島した10人のLMS (ロンドン・ミショナリー・ソサイエティ) の宣教師がトンガタブ島西部のヒヒフォ地区を中心として布教活動が続けていたが、以上のような状況の中で、布教活動はほとんど不可能になった。最終的には、ヴェイソンという名の宣教師を除くLMS宣教師のうち、3人が殺害され、残りの宣教師は、オーストラリアのニュー・サウス・ウェールズに逃れざるを得なくなったという (Latukefu [1974] pp.26-27)。こういった血腥い戦闘が続く中で、トンガの人々は危険を回避するために各地に要塞 (コロ) を築き、この要塞の中で生活するようになった。このようにして散村形態から集村形態への転換が進行していったと考えられる。

1806年から4年間にわたってトンガに滞在し、自らも銃砲の名手としてフィナウに協力して多くの戦闘に参加したイギリス人、W・マリナーの記録によれば、1807年、トンガタブ島には12の要塞があった (Mariner [1827] Vol.1, p.93)。これらの要塞の中でも、現在のヌクアロファのシオンの丘の上に築かれていたヴェイオゴという要塞が最も強固なものであった。ヴェイオゴは、面積約2万平方メートル、高さ2.7メートルのヤシの葉で編んだ頑丈な塀によって囲まれており、塀の内部には敵を監視するための望楼が建てられていた。要塞の周囲には、ともに深さ約3.6メートルの内堀と外堀の二つの堀が巡らされ、全体的に人口密度の高い強固な環濠集落の構造を備えていた (Mariner [1827] Vol.1, pp.94-95)。しかし、1807年にフィナウの軍勢の攻撃に曝され、最終的にはマリナーが操る大砲などの重火器で完全に破壊されてしまった。なお、この強固な要塞の西側には、古くからトゥイ・カノクポルの系譜に属する有力首長が居住する散村が広がっていた。

現在のヌクアロファの都市空間は、コロモトゥア (Kolomotu'a)、コロフォオウ (Kolofo'ou)、マウファンガ (Ma'ufanga) と呼ばれる三つの地区か

ら構成されているが(図2参照), ヴェイオゴの要塞は, コロモトゥアとコロフォオウの境界の近くに位置していた。そして, ヴェイオゴの西側の散村は, 現在のコロモトゥア地区の中に広がっていた。また伝承によれば, ヌクアロファ東部のマウファンガ地区には, 古くから数名の小首長と高名な祭司が居住する散村が広がっており, この散村の中には, 難を逃れて集まってきた人々を救済・保護する聖域(アジール)もあったという。そして, 両者の間に位置するコロフォオウは, 当時, ブッシュが広がる未開拓な地域であり, 文字どおり新開地(Kolofo'ouは「新しい村」の意)として, ウェズリアン派宣教師および内乱状態の中で急速に台頭してきたハーパイ諸島の野心的首長タウファアハウ(Taufa'ahau)によって開拓され, 後で述べるように1860年代には王宮や政府機関が集まるヌクアロファのセンターへと発展していった。コロモトゥアとマウファンガは, ヴェイオゴの要塞よりもはるかに古い集落であったが, 人口の疎らな散村であった。これに対して, ヴェイオゴの要塞は, 短期間で消滅したとはいえ, 現在のヌクアロファの都市域の中で最初に出現した人口密度の高い集落(環濠集落)であった。このような意味で, 首都ヌクアロファ(「愛の町」の意)の直接的な起源は, 皮肉なことに, 血腥い戦闘で崩壊したヴェイオゴの環濠集落であったと言わねばならない。

2. ウェズリアンの本拠地としてのヌクアロファ

1822年, ローリー(Walter Lawry)が, 彼の妻, 子供, および3名の宣教師とともに, ウェズリアンとして初めてトンガにやってきた。彼は, ファトゥという首長によって歓迎され, 彼の保護のもとにトゥイ・トンガの館があったラパハに定住して布教活動を開始した。しかし, 同時に伝統派の祭司や首長の執拗な排除の動きに苦しめられた。その結果, ローリーは, 翌年布教活動を断念し, トンガを去っていった(Latukefu [1974] pp.27-28)。

1826年にローリーの後任として, トーマス(Jhon Thomas)とハッチンソン(John Hutchson)がシドニーのウェズリアン伝道局からトンガに派遣さ

れてきた。彼らは、前任者の轍を踏まないようにするために、伝道所をトゥイ・カノクポルの本拠地となっていた集落、ヒヒフォに置き、当地の有力首長アタの庇護を受けた。しかしアタは、期待していた武器や助力をウェズリアン宣教師から得ることができなくなったので、次第に彼らに迫害を加えるようになった。改宗を迫る宣教師に対して、アタは、「私達には祖先から受け継いだ私達のやりかたがある、私の心は変わらない、あなた方の宗教には加わらない」と答えたという (Latukefu [1974] p.28)。このようにして、ヒヒフォでも状況が悪化し、同地での布教活動はほとんど不可能になった。

以上の経緯は、明らかに、トンガの首長が既成のパパランギ (白人) のカテゴリー (経済取引活動における交渉相手)⁽⁴⁾に基づいてウェズリアンに武器をはじめとする西洋の物品の安定的な供給と政治・軍事における助力を求めていることに対して、ウェズリアンの方はあくまでも〈教化〉にこだわり、そこから両者の間に葛藤が昂じていったことを示している。あくまでも〈教化〉にこだわるパパランギとのネゴシエーションを推進するためには、単にパパランギの概念に新しい意味を付加するだけではなく、より大規模な伝統文化の主体的・選択的な再構成がトンガの人々の側に求められていたのである。

この困難なプロセスを推進した人物が、トゥポウトア (17代トゥイ・カノクポル) の息子、タウファアハウであった。18世紀末までは、パパランギとトンガの人々の間に起った種々の非日常的出来事は、伝統的文化システムのなかに柔軟に吸収され、初期国家は自らを再生産してきた。そして内乱に突入してから、パパランギにまつわる出来事は、伝統的な文化カテゴリー間の関係 (トゥイ・トンガとトゥイ・カノクポル、王と首長、王・首長と民衆、王・首長とマタブレ、称号と血等々) に深い亀裂を与えていった。しかし、タウファアハウは、トンガにおける歴史と構造の関係にそれ以前には見られなかった決定的な変化をもたらしたのである。彼は、政治的統一を達成するために、伝統文化としてのタブーの一部を廃棄することも辞さなかった。伝統的な象徴体系とその中心に位置してきたトゥイ・トンガの神聖性は、既に崩壊して

いたが、多くの首長はそのようなタブーの廃棄をあからさまに表明することを差し控えていた。そうすることは、各首長の政治的支配の基盤である親族の原理、とりわけ年長性原理の否定を意味したからである。トゥイ・カノクポルの称号の正統な継承者であると目されていたタウファアハウにとっても、200年以上にわたって続いてきたトゥイ・カノクポル王家（年少リネージ）とトゥイ・トンガ王家（年長リネージ）との婚姻連帯関係を否定することはかなり困難であったと思われる。それにもかかわらず、タウファアハウは、敢えて伝統的なタブーを破り、トゥイ・トンガ王家との既成の婚姻連帯関係を否定する覚悟を固めていったのである。このような決意のもとに、タウファアハウは、後にトゥイ・トンガ（最後のトゥイ・トンガ）となるラウフィリトンガとハーパイ群島で一戦を交えた。トゥイ・トンガ王家が途絶する危険があることを察知したラウフィリトンガは、神なる王の属性を捨てて、銃と戦士を各地から集め、この戦いに備えていた。その結果、ハーパイでの一戦では、ラウフィリトンガがタウファアハウを敗走させて勝利を収めた。敗走したタウファアハウは、トンガタブ島まで行って多くの首長を味方につけるとともに大量の銃を入手し、次の戦いに備えた。1826年、タウファアハウとラウフィリトンガは、ハーパイで最後の決戦に臨んだが、今度はタウファアハウが勝利した。このラウフィリトンガの敗北によって、トゥイ・トンガ王朝の途絶は時間の問題となり、同時にタウファアハウによるトンガ全島統一の可能性は大いに高まった。

ちょうどこの時期に、トンガのウェズリアン宣教師のもとに福音が届いた。ナサニエル・ターナー（Nathaniel Turner）が1827年来島するという知らせである。豊かな教育とニュージーランド・マオリ社会における充分な布教経験を持っていたターナーは、ラパハやヒヒフォの状況を調べた上で、同年ヌクアロファに伝道所を開設した。ターナーがヌクアロファを選択した第一の理由は、タヒチ人のLMS宣教師（ローリーの感化を受けたフィジー人タカイが連れてきたハベとダヴィダ）が、既に1826年から教会を建てて、キリスト教の布教を行い、1827年には約300人のトンガ人が定期的に礼拝に参加する

ようになっていたことである。第二の理由は、ヌクアロファ（コロモトゥア）の首長で後にトゥイ・カノクポルになった、アレアモトゥア（Aleamotu'a）が、有力首長としては珍しくキリスト教に深い関心を示していたことである（Campbell [1992] p.54）。さらに、穏やかなリーフに面し、南東貿易風の影響が少なく、船の接岸に便利なヌクアロファの地理上の位置も選択の理由の一つであったと思われる（Walsh [1972] p.13）。

アレアモトゥアは、1828年にトゥイ・カノクポルに即位したが、即位後もターナーやタヒチ人宣教師からキリスト教的知識を積極的に吸収し、1830年にキリスト教に改宗した。ここで重要なことは、アレアモトゥアの改宗、即ちヌクアロファを本拠地とするトゥイ・カノクポルの改宗によって、ウェズリアン派の本拠地としてのヌクアロファの位置づけが決定的なものとなったということである。当時のウェズリアン宣教師の一人、アモスは、「ヌクアロファというこの近代的な町は、純粋なキリスト教の創造物である」と誇らかに宣言して、ウェズリアンの拠点＝ヌクアロファの更なる発展への確信を表明している（Amos [1854] p.870）。

1830年、改宗したアレアモトゥアはさらに、自分の甥の息子であったタウファアハウのもとに使者を派遣して、タウファアハウにキリスト教に改宗せよと助言した。タウファアハウはアレアモトゥアの助言を受け入れ、遂に1831年にキリスト教に改宗した。改宗したタウファアハウは、ウェズリアン宣教師の勧めに従って、名前をジョージ1世と改めた。ここで逢着する問題は、この時期のウェズリアン宣教師とキリスト教徒となったジョージ1世の複雑な関係であり、その後、トンガにおける教会と国家（church and state）のあり方をめぐる論争へと発展していく論題である。ウェズリアン宣教師は、ジョージ1世を、聡明で傑出した行動力を有する人物ではあるが、「クリスチャン・キングダム」の建設に必要な知識を持っていない、改宗したばかりの「半文明人」と見なしていたので、些細な事柄に至るまで細かな指示を与えてジョージ1世を指導しようとした。このようなウェズリアン宣教師の高圧的な態度の下には、産業資本主義の進展と領土の拡張を通して目ざましい

発展を遂げていた祖国（大英帝国）の国力に対する自信と誇りが默示的に横たわっていたと言えよう。J・ウェズリーのメソディスト運動に由来するウェズリアン派は、本国においては、体制的宗教である英国国教会から排除された新興の周縁的な宗教集団に過ぎなかったが、遠くの「未開地」で、フランスの脅威を感じながら布教に従事する宣教師にとっては、英国の国力は布教を支える間接的な拠り所であった。一方、植民地主義に基づく領土の拡大を志向する英国の支配層にとっても、ウェズリアン派の布教活動は、リバイバル的傾向が顕著であったとはいえ、植民地にふさわしい心と体をもった人間の育成と植民地への貨幣経済の浸透を促進してくれるが故に、本格的な植民地化に向けての地均しとして好都合なものであった。このような意味で、ウェズリアン宣教師のジョージ1世に対する高圧的な態度は、ウェズリアン宣教師と英国植民地主義勢力との間接的な絆の表れであったと言えよう。ジョージ1世もまた、パパラングの宗教と物質文明の圧倒的な優越性を認めていたので、ウェズリアン宣教師の「指示」(direction) に素直に従っていたという (Latukeyu [1974] p.120)。とはいえ、この時期のジョージ1世が、主体的・選択的な行為を全く放棄したというわけではない。宣教師の「指示」が理不尽であると思われたときには、自らの意志で行動することもあったのである。ウェズリアン宣教師の側も、大きな弱点（ジョージ1世離反への危惧の念）を抱えていたので、ジョージ1世の不服従を過度に責めることはできなかったようである (Latukeyu [1974] p.121)。このような默示的な植民地状況が既に進行していたので、取捨選択の余地はかなり限られていたが、それでもジョージ1世は、課された制限の枠内で可能な限り、宣教師から有益な知識と物質的な富を選択的に引き出し、内乱を勝利に導こうとしたのである。ジョージ1世の懸命の主体的・選択的な努力は、やがてウェズリアン宣教師の側の妥協という形で報われた。教化と命令のみにこだわり、戦乱への介入を躊躇していたウェズリアン宣教師が、従来の戦略を改めて、キリスト教徒となったジョージ1世と異教徒の諸首長との闘いを積極的に「聖戦」と位置づけるようになったのである。その結果、宣教師自らが商人とし

てジョージ1世に大量の武器・弾薬を供給するようになった (Gailey [1987] p.180)。

装備において圧倒的に優勢になったジョージ1世は各地で勝利を収め、1830年代末には、ヴァヴァウとハーパイをほぼ支配下に入れた。同時に、宣教師の助言を受け入れながら法典の編纂に着手し、1839年にヴァヴァウ法典 (Code of Vavau) と呼ばれる最初の成文法をヴァヴァウ島の大きな集落、ネイアフで発布した (Latukefu [1974] p.121)。この法典で注目すべき点は、第1に、宣教師とのネゴシエーションの中で、西洋人に対するトンガ人の主体性・自主性を何とか承認させて、トンガに滞在する英国人ならびにその他の外国人はすべて同法に従わねばならないという条項を設けていることであり、第2に、貨幣経済を受容する姿勢を打ち出すために、割礼・入れ墨の禁止、偶像崇拜儀礼の禁止、強い蒸留酒の飲酒・販売の禁止などの規定に違反した場合、現物ではなく、現金 (ドル) の科料が科せられていることであり、第3に、キリスト教を基盤とする新国家秩序の構築に向けて、首長の伝統的な特権の一部を制限して、民衆に土地を分与することを首長に求めていることである。

しかしながら、ジョージ1世による新国家秩序の構築はその後必ずしも順調に進捗したわけではない。1842年に、カトリック教会は主イエス・キリストが掟を与え給われた唯一の教会であり、トンガの人々は未だ真の宗教を知らないという主張を掲げて (Latukefu [1974] p.136)、カトリック伝道所がトンガに開設された。カトリックの宣教師は、ウェズリアン派に対抗して、ラウフィリトンガ (トゥイ・トンガ) およびジョージ1世に反感を抱くトンガタブ島のマアフやラヴァカなどの首長と結びついた。1845年に、支配の正統化のために伝統文化の一部を継承する必要性を認識したジョージ1世は、19代トゥイ・カノクポルとして即位した。トゥイ・カノクポルとなったジョージ1世は、1845年にヌクアロファにおいて、「余はここからトンガを統治する、この地が余の将来のキャピタルとなるであろう」と述べて、ヌクアロファを政治統合の中心地とするための一連の措置に向けて強い決意を表明し

た (Walsh [1972] p.13)。その後、1850年には、ヴァヴァウ法典を発展させた法典 (The 1850 Code of Laws) を発布し、自己の支配を固めようとしていた。カトリックの宣教師はラウフィリトンガを担ぎ出してこれに対抗しようとした。自己の神聖性が伝統的な象徴体系に由来するものであることを充分に認識していたラウフィリトンガは、当初カトリックとプロテスタントの双方を頑なに拒んでいたが、1847年、ラパハで遂にカトリックに改宗した。この出来事によってトゥイ・トンガ (ラウフィリトンガ) が居住する集落、ラパハが、ウェズリアン派の本拠地ヌクアロファに対抗するための、カトリック布教の中心地という意味を獲得するようになった。このようにして、内乱は、キリスト教徒対異教徒の戦いからプロテスタント対カトリックの戦いに、さらにヌクアロファ対ラパハの闘いに変化していった。ラパハを拠点とするカトリック陣営の様々な工作にもかかわらず、事態は相変わらずヌクアロファのウェズリアンの支援を受けたジョージ1世に有利な方向に推移した。追いつめられたカトリック陣営は、フランス海軍の介入に最後の希望を託してトンガタブ島のペアという要塞の強化を行って、立て籠ったという (Latu-kefu [1974] p.136)。しかし、ペアの要塞はジョージ1世の軍勢に包囲され、激しい攻防の末、1852年8月に遂に陥落した。頼みにしていたフランス海軍の到着は、同年12月であった。このようにして半世紀以上にわたる政治的な混乱が終息し、ジョージ1世はトンガの実質的な支配者となり、ヌクアロファも実質的な新国家の首都となった。ヌクアロファの人口も徐々に増加し、1854年には約1200名に達するまでになった (Amos [1854] p.870)。しかし、国際社会で近代的な立憲君主国として承認されるためには、また、ヌクアロファが真の首都となるためには、トンガ王国憲法の公布、王宮、枢密院、内閣、議会、裁判所、金融機関、道路網、商業施設、貿易港といった諸機関の創設という手続きを踏まなければならなかった。ジョージ1世のもとで、この仕事を行った人物が、S・ベーカー (Shirley Waldemar Baker) である。

第4節 ポートタウン＝ヌクアロファの形成と発展

1. ヌクアロファ都市空間の整備

S・ベーカーは、1860年にウェズリアン宣教師の一人としてトンガに到着した。S・ベーカーは、彼の娘によって出版された回想記のなかでは、英国国教会の聖職者でありかつオックスフォード・ホーム・グラマースクールの校長であったジョージ・ベーカーの息子として1836年にロンドンに生まれ、その後良家の子弟として恵まれた教育を受けながら成長していった紳士として描かれている (Rutherford [1971] p.1)。しかし、こういったベーカー像は彼自身によって捏造されたものであるようだ。というのは、S・ベーカーと交流のあった人物が、彼の品格を形容する上で、異口同音に「粗野」、「無教養」、「無知」といった言葉を使用しているからである。さらに、S・ベーカーの英語の発音は教養層のアクセントとは程遠いものであったという (Rutherford [1971] p.2)。S・ベーカーは、現在のトンガのウェズリアン・メソヂスト宣教師のあいだでは、「下層から叩き上げた粗野な人物ではあったが、たぐいまれな政治力の持ち主であり、ポリティカル・アニマルと称すべきほどの精力的な策士」というイメージで語られることが多いが、上述の事実を考慮するならば、こういったイメージの方がS・ベーカーの実像により近いものであると言えよう。

S・ベーカーが来島した頃、既に、ウェズリアン宣教師とジョージ1世の関係は完全に冷えきっていた。先に述べたように、1830年代にも、ウェズリアン宣教師と英国植民地主義勢力との結びつきは見られたが、それはまだ默示的かつ間接的な性格のものにとどまっていた。しかしながら、1840年代末からウェズリアン宣教師は、明示的かつ直接的に英国植民地主義勢力と手を結び始めた。この点は、トンガを英国に譲り渡すことが最善の道であることをジョージ1世に告げたところ、ジョージ1世は烈火のごとく怒ったと述べ

ているJ・トーマスの報告からも明らかである(Thomas [1849] 19 Nov.)。

こういったウェズリアン宣教師の植民地主義的言動は、その後ますます露骨になっていったので、ジョージ1世とウェズリアン宣教師の間の亀裂は、修復不可能なほどに拡大していった。こういった両者の確執が、1880年代の大きな政治・宗教的な出来事、すなわちオーストラリアのウェズリアン伝道局の影響から全く自由なトンガに固有の国教会——トンガ自由教会(The Free Church of Tonga)——の創設(1885年)を引き起こしたのである。一方、S・ペーカーの方も大きな問題を抱えるようになっていた。当初、S・ペーカーは、トンガタブ島ハハケ地区で布教に従事していたが、彼の頑固かつ粗野な態度が同僚宣教師の反感を招き、次第に宣教師の間で孤立するようになり、それに伴って、トンガの「伝統」を擁護しながら、ウェズリアン派と英国植民地主義勢力の双方を非難する言動を繰り返すようになった。このような状況の中で、ジョージ1世とS・ペーカーの利害が一致し、両者は相互補完的な関係を取り結ぶようになった。

ジョージ1世の厚い信任を得たS・ペーカーは、やがて反ウェズリアンの・反西洋植民地主義的な理念を盛り込んだ新しい法案の起草を委ねられた。彼は、短期間でこの仕事を完成させ、1862年に、トンガの政治的独立性、伝統的な首長の特権の制限、トゥア(民衆)の解放(emancipation)等々を定めた条項を含む画期的な1862年法典(The 1862 Code of Laws)が発布された(Latukefu [1974] pp.171-179)。この法典によって、トンガは立憲君主国家としての基盤を獲得し、ヌクアロファも法的な裏付けをもった立憲君主国家の首都となった。

立憲君主国家の成立を契機として、ジョージ1世は、S・ペーカーの助言を受け入れながら、主体的かつ選択的に首都ヌクアロファの整備に着手していった。ここでまず留意すべきことは、ヌクアロファ整備の過程の中で、先述したラパハの古い空間構造が部分的に選択・再現されたと思われる点である。この伝統文化の部分的な再現は、基本的にはジョージ1世の主体的な選択によるものであるが、S・ペーカーの英国植民地主義勢力を敵視する言動

もジョージ1世の選択と決して無関係ではなかったであろう。ジョージ1世が属するトゥイ・カノクボル王朝の系譜がラパハにおいて占有していた空間は、タタカモトンガと呼ばれていた。タタカモトンガの中心は、トゥイ・カノクボルの居所であった。トゥイ・カノクボルの居所の北北東の入江には、カヌーの船着場があったと伝えられている。この居所の南西にトゥイ・カノクボルに仕える祭司 (taula otua) の社が、また南東にはトゥイ・カノクボルとその家臣が政務を執り行ったり、賓客の接待にあたる大きな建物 (ファレハウ) が立っていた。そしてトゥイ・カノクボルの居所とファレハウとの間には、マラエと呼ばれる緑に覆われた広場 (儀礼空間) がこしらえられていた (図1参照)。こういったタタカモトンガの空間構造は、ヌクアロファの新開地コロフォオウのレイアウトが計画された段階で、意識的に維持されたと言えよう (図2参照)。まず1867年に、かつてヴェイオゴの要塞があったシオンの丘の東側約400メートルの地点にジョージ1世の王宮が建てられた。王宮は、赤い屋根に白いウェザーボードの壁をもった、優雅なヴィクトリア様式の木造建築で、建築資材はニュージーランドから輸入された。王宮の周りには、同じくニュージーランドから輸入されたノフォーク・パイン・トゥリーと呼ばれる常緑高木が植えられ、王宮の東南には、タタカモトンガの祭司 (taula otua) の社に相当するチャペルが建てられた。さらに、王宮の東側には、王宮に隣接するかたちでマラエ (マラエパンガイ) が整備され、王宮の北東にはタタカモトンガのカヌーの船着場に相当する波止場が建設された。また、王宮の東側には芝生で舗装されたタウファアハウ・ロードと呼ばれる南北方向に延びる大通りが通され、この通りを挟んで王宮の南南東に位置する地点に立憲君主国家の政務を司る政府庁舎が建てられた。このようにして、方角に僅かなずれはあるが、ラパハにおけるトゥイ・カノクボルの占有空間の構造がヌクアロファの中心部においても部分的に再生産されていたと見ることができよう。それとともなって、ヌクアロファは、ウェズリアン派の布教拠点から、教会 (先述したトンガ自由教会) と国家 (ジョージ1世の王国) の同盟の拠点へと、その存在性格を徐々に変えていったのである。

2. ポートタウンとしてのヌクアロファ

しかしながら先述したように、ヌクアロファは広義の植民地状況の所産であったので、植民地状況に由来する種々の外的影響を全て既成のカテゴリーの中に埋め込むことは不可能であった。ジョージ1世とS・ペーカーの反西洋植民地主義的な言動それ自体が、植民地状況への明確なリアクションであったことが銘記されねばならない。新たにもたらされた未知の存在（貿易商社、小売店舗、旅行客、ゲストハウス、中等学校、種々の工業製品等々）は、既成の構造の組み替えと新しい文化要素の付加を必要とし、ジョージ・マーカスの言う「折衷文化」(compromise culture <在来文化と西洋文化との巧みな融合・重層からなる新文化>)の形成を促進していった(Marcus [1980] p.10)。こういった「折衷文化」は、ヌクアロファの中心部にラパハの古い構造を部分的に現出させはしたが、全体的に見るならば、ラパハとは非常に異なった空間の消費構造を創出していったのである。

19世紀後半のヌクアロファの空間構造をラパハのそれから区別する最も顕著な示差の特徴は、ヌクアロファの波止場の近くに集まっていた西洋の貿易商人の館と彼らの店舗・事務所の存在である。19世紀初頭には既に、オーストラリアの捕鯨船やフィジーで船積みした白檀を中国市場に運ぶ商船がトンガタブ島に立ち寄っていた。また、1820年代には、タヒチで生産されたポークをシドニーに輸送するオーストラリアの商船が水や食糧の補給のためにトンガタブ島に寄港していた。しかし、トンガタブ島は南太平洋の定期交易ルートから外れていたもので、これらの捕鯨船や商船の寄港は不定期で、しかも極めて稀であった。商船が定期的にトンガタブ島を訪れるようになったのは、ヌクアロファがトンガ王国の首都となった1860年代初頭以降である。1860年代には、「2～3年で財をなすことのできる」島という投書が新聞にも載るようになり (*New Zealand Advertiser*, 19 June 1865)、少なからぬ数の貿易商人がオーストラリア、ニュージーランド、ヨーロッパからやって来て、ヌク

アロファの波止場の近くに定住するようになった。1866年には、54人の商人がヌクアロファに定住し、7000トンのココナッツ・オイル（金額にして1万5000ポンド相当）を輸出するまでになったという（Campbell [1992] p.103）。ヌクアロファに定住する貿易商人の数が増えるにつれて、彼らは「半文明的（semi-civilised）なトンガ政府」を横柄に見下すようになり、生意気なトンガ政府の権限を制限していただきたいという旨の陳情書をニュー・サウス・ウェールズ総督宛に送付するまでになった（Rutherford [1971] p.50）。

また当時のトンガの代表的な貿易商人（コブラ・トレーダー）であったフィリップ・ペインのように、ヌクアロファの裁判所の判決を公然と無視する者もいた⁽⁵⁾。1869年に、ハンブルクに本拠地を置くドイツの大企業⁽⁶⁾、ゴドフロイ・ウント・ゾーンがウェズリアン宣教師と手を結んで、トンガの輸出入を支配するようになった。ゴドフロイは、それまでのトンガの輸出品であったココナッツ・オイルではなく、コブラを買い上げてドイツ本国でオイルを抽出する企業戦略を取っていたので、ゴドフロイの進出後、トンガの輸出品は急速にコブラへ傾斜していった。しかし、ゴドフロイ・ウント・ゾーンは、1878年にトンガにおける利権を、同じドイツの大きな貿易会社であったD.H.P.G. (Deutsche Handels- und Plantagen-Gesellschaft) に譲り渡して、トンガから撤退した。D.H.P.G. の進出後、綿花、コーヒー、果樹などの換金作物やウールの生産など、農業の多様化が奨励されたが、何れも安定した産業に成長するまでには至らなかった。国内市場も、1887年のS・ベーカー暗殺未遂事件に続いてジョージ2世時代（ジョージ1世の没後、1893年に即位し、1918年まで在位した）の種々の政治不穏（国家財政の危機、汚職・不正の蔓延、ジョージ2世と諸首長との軋轢、英国の内政干渉）もあって、20世紀初頭に至るまで大きく拡大することはなかったが、19世紀末までには村落部においても教会への献金、罰金、地代、学費などの特定目的の支払いは貨幣で行われるようになっていた。首長層では、集めた地代の投資が海外市場の変動の影響を被り、民衆の生活は、大多数の農民がD.H.P.G. の奨励する換金作物（特にコブラとバナナ）を生産していたので、国際市場におけるこれらの換金

作物の価格変動に大きく左右されるようになった。このようにして、トンガは、19世紀末までに世界資本主義経済の周縁に完全に組み込まれてしまったのである。トンガの世界資本主義経済への統合は、ヌクアロファのポータウンとしての用能的性格の強化という重要な歴史的帰結をもたらすことになった。その結果、ポータウンとしてのヌクアロファを媒介として、トンガタブ島の村落部、ハーパイ諸島、ヴァヴァウ諸島、エウアイ島等のヒンターランドが、フィジーのスバのようなリージョナルなフォワランドと結合され、さらにロンドン、ハンプルク、シドニー、オークランドといった西洋社会のフォワランドと接合されていった。ポータウン＝ヌクアロファと西洋社会のフォワランドとの関係は、太平洋島嶼社会の他のポータウンの場合と同様に、圧倒的な力の落差によって支配されていたので、極めて非対称的なものであった。ヌクアロファからの輸出品は、コブラ、ココナツ・オイル、バナナなど、ごく限られた安い一次産品のみであったが、西洋のフォワランドからは、繊維製品から機械類に至るまで、ほぼ全ての高価な工業製品が輸入されていたので、世紀の転換期には急速に経済状況が悪化していった。このような顕著な従属関係は、トンガの内部においても広範に形成され、トンガのヒンターランドは、コブラ、ココナツ・オイル、バナナなどの一次産品の売り渡しや工業製品、とりわけ衣類の購入において、ヌクアロファに従属しなければ存立し得なくなる状況が出現した。このような状況の中で、ヴァヴァウのネイアフやハーパイのリフカなど、ヒンターランドに位置する小さな町と、ポータウン＝ヌクアロファとの落差も年ごとに拡大していった。以上のような経済的な従属構造は、1900年にトンガが「英国保護国」という名称で植民地化されたことを契機として、法的にも正当化されることになったのである。しかしながら、ここで留意せねばならないことは、トンガの土地制度が、従属関係の無制限の進展を抑止したという歴史的事実である。トンガでは、1862年法典においても、1875年憲法においても、土地の売買が禁止されていたので、西洋人が土地を入手する場合、土地の使用権だけを期限付きのリースという形で買い取るほかに道はなかった。そのために、19世紀末

から20世紀半ばにかけてのヌクアロファでは、西洋から来た商人の数が一定数に達した後は、ほとんど増えることはなかったのである。この点は、西洋人が土地を収奪してプランテーションを拓いていったサモアやフィジーには見られない、トンガに固有の現象であったと言えるであろう。

ポートタウンとしてヌクアロファを見ると、次に注目せねばならないことは、ヌクアロファがトンガにおける新文化の発信源として作用していたという点である。目に見える最も顕著な変容は、西洋からの「物質文明」の流入である。1860年代末の王宮・政府庁舎の建設に続いて、1870年代には、白いウェザーボードで飾られたコロニアル風の商人の館や店舗がコロフォオウ地区に立ち並ぶようになった。さらに、1880年代には、隣接するコロモトゥア地区やマウファンガ地区にも、同様の概観を有するトンガの富裕層（主としてヌクアロファに住む貴族層）の瀟洒な民家が建てられるようになった。1890年代になると、こういった建築様式は、ベッド、スプーン、食器などの消費財とともに、ヒンターランドに住む首長（貴族）の館のデザインに取り入れられ、その後20世紀に入ってから徐々に、ヌクアロファに住む民衆層の住居デザインにも影響を与えていった⁽⁷⁾。流入した「物質文明」の中で、早い段階から広範な影響をトンガの人々に与えていったモノは、繊維製品、とりわけコットンである。貿易商人によってヌクアロファに輸入された大量のコットンは、1875年憲法で在来のタパ布の着用が禁止されたことを契機として、1880年代に伝統的な衣服であったタパ布に取って代わった。その結果、それまでタパ布をはじめとするコロア（貴重財）の生産を担ってきたトンガの女性の急激な地位低下が引き起こされたという（Gailey [1987] pp.227-228）。コットンの衣服は短期日のうちにトンガ全体に定着し、20世紀初頭のヌクアロファは、「南太平洋で最も素晴らしい趣味」のファッション文化を誇るほどであった（Glimshaw [1907] p.284）。19世紀末には、プラスバンドやハーモニカの演奏がヌクアロファで盛んになり、1910年代には金曜日の夜に定期的に演奏会が開かれていたという（Gifford [1924] p.288）。ヌクアロファで始まったこのバンド演奏やハーモニカ演奏は、その後ヒンターランド

における教会活動の不可欠の構成要素となっていく。19世紀末には、ヌクアロファでクリケットの試合が頻繁に行われるようになり、20世紀初頭にはヒンターランドにもクリケットが波及していった。また、1910年代には、映画がヌクアロファに導入され、コロフォオウ地区の中心部に二つの映画館が開設された。この二つの映画館は大変な評判となり、平日でも満員の状態が続いたという⁽⁸⁾。このヌクアロファに導入された新しいメディアは、トンガタプ島のヒンターランドの人々をヌクアロファに呼び寄せ、トンガの民衆にフォワランドに関する新しい情報と新しいスペクタクルを提供するようになった。ヌクアロファにおけるもう一つの重要なスペクタクルは、フォワランドから物資を満載して来た蒸気船の入港であった。1カ月に1度の定期船の入港日には、波止場は興奮が渦巻く大きな「劇場」と化した。ヒンターランドの各地から多くの人々が波止場に集まり、露店で小さな買物を楽しんだり、早足で歩き回ったり、歓声をあげたり、フォワランドの最新情報に触れたり、旅行者との新たな出会いを経験したりして、非日常的な時間を楽しんだという (Glimshaw [1907] p.278)。この時期のヌクアロファは、一方では税の取り立てや罰金の命令の発信源として、民衆の上に聳え立つ超絶的な空間として客体化されていたが、他方では買物を楽しんだり、スペクタクルに興じたりする祝祭空間として表象されていたと言えよう。ヌクアロファに導入された新しい「物質文明」の中には、一般のトンガの民衆がその恩恵に与ることのできないようなモノもあった。1910年代末には、早くもガソリン車、電話、タイプライターがヌクアロファに輸入され、西洋人やトンガの支配層の人々によって使用されるようになった。こういった「文明の利器」は、20世紀初めのトンガの一般民衆には全く無縁なモノであったが、それでもトンガの民衆の心の中に「物質文明」に対する強い憧れの念を引き起こしたようである⁽⁹⁾。

19世紀中葉から20世紀初めにかけてのヌクアロファは、エリート教育による階級分化の進行という、それ以前のトンガには見られなかった新しい歴史過程の震源地でもあった。トンガにおける最初中等教育機関は、ウェズリ

アン派の有力な宣教師であったムールトン (James Moulton) によって、1866年にヌクアロファに設立されたトゥポウ・コレッジ (Tupou College) である。ムールトンと先述したS・ベーカーは、それぞれ19世紀末の「植民地」で活躍した「二つの対照的な英国人の型」を代表する人物であったようである (Garrett [1992] p.142)。ムールトンは、S・ベーカーとは対照的にオックスフォード神聖クラブ (The Holy Club at Oxford) を源流とする正統的メソヂスト信仰の伝統を汲む学者肌の宣教師であり、ギリシア・ラテン語に精通し、首長層のトンガ語を巧みに話し、賛美歌作曲家としてもウェズリアン教会に多大な貢献を行った人物である。こういった学者肌のムールトンは、トゥポウ・コレッジを「英国のパブリック・スクールのようなエリート校に育て上げたい」という夢を持っていたので、創設当初から、ラテン語、英語、歴史、代数学、幾何学、物理学といった教科からなるアカデミックなカリキュラムに基づく厳しいエリート教育を行っていった⁽¹⁰⁾。ムールトンはまた、情報が行き交うポートタウン＝ヌクアロファの利点を活かして、様々な機会を捉えて「海外からの新情報」を積極的に学生に伝達していたという。やがて、ムールトンの努力は報われ、トゥポウ・コレッジは、「トンガで最高のエリート養成機関」として高い評価を与えられるようになり、指導的な聖職者や国家官僚を生み出していくようになった。そして、トゥポウ・コレッジが育成した聖職者や国家官僚は、海外での伝道や留学のために、ポートタウン＝ヌクアロファから送り出されていったのである。しかしながら、ムールトンは、近代の学校教育が内包する根本的な矛盾に苦しめられていた。ムールトンの教育理念は、ウェズリアン信仰に基づく優れた人格の育成という教育の自己目的的な側面を強調するものであったが、エリート校として認められるようになるにつれて、近代教育のもう一つの側面、すなわち権力・利益の分配と結びついた教育の功利主義的側面の方が際だってくるようになり、富裕層の再生産のための機関という評価が定着するようになった。このようにして、ムールトンの学校は、ヒンターランドとフォワランドをヌクアロファが非対称的に媒介する経済過程を通して進行していた階級分化

(首長層と民衆層の間に存在していた親族関係の紐帯の切断、および民衆層から析出された民衆エリートの上昇移動)を更に促進助長する役割を果たすことになったのである。

おわりに

以上、本章では、散村形態から集村形態への移行(18世紀末)、集村としてのヌクアロファの誕生(18世紀末～19世紀初頭)、ウェズリアン派宣教師の布教拠点としてのヌクアロファ(19世紀初め～19世紀中葉)、首都としてのヌクアロファの誕生(19世紀中葉)、ポートタウンとしてのヌクアロファの形成・発展(19世紀中葉～20世紀初め)という一連の歴史過程を、都市の実効的な用在性と客体化された表象の両面において述べてきた。ところが、ポートタウンとしてのヌクアロファの発展といっても、20世紀初めのヌクアロファの人口はまだかなり少なく(1905年の推定人口2300名、1931年に4006名)であり、本格的なヌクアロファへの人口集中が起きるのは第二次世界大戦後の約30年間である(1956年に9202名、1966年に1万5545名、1976年に2万1327名)⁽¹¹⁾。第二次世界大戦後に生じたヌクアロファへの人口集中は、1960年代初めから「インターナショナルゼーション」の到来と現国王トゥポウ4世の「開発政策」の推進によって加速されるようになった。このような状況のなかで、まず1960年代初めにエウア、ハーパイ、ヴァヴァウ、ニウアといった周縁の島嶼群から主島のトンガタブ島(とりわけ首都ヌクアロファ)への国内移住の波が顕著になった。1976年のセンサスによると、トンガタブ島の総人口は5万7411名であり、このなかでヴァヴァウ出身者数4615人、ハーパイ出身者数5229人、ニウア出身者数1087人、エウア出身者数697人となっており、周縁の島嶼出身者の総数は1万1628人(トンガタブ総人口の約20%強)に上っており、統計局の担当官によると、周縁の島嶼出身者総数の約70%が1960年代初め以降の移住者と推定されるという。

このような人口集中に伴って、種々の都市問題がヌクアロファにおいても深刻になっていった。人口集中に伴ってまず最初に顕在化した問題は、ヌクアロファを取り巻く自然環境の変化である。急速な人口集中が起こる前は、豊かなココヤシ林、タロイモ畑、ブッシュがヌクアロファ都市空間を取り囲んでいた。しかし、新しい流入者の多くは、これらのココヤシ林、タロイモ畑、ブッシュを切り開いて、住宅を建設していった。その結果、1960年代後半に、ヌクアロファの町は、東、西、そして南の方向に急速にスプロールしていった。当時、ヌクアロファの住民でプロパンガスを燃料として使うことができるのは、ごく一握りの富裕な人々に限られており、大多数の人々は近くのブッシュから採ってきた薪を炊事に使っていたので、ブッシュの消滅はヌクアロファ住民の日常生活に大きな打撃を与えた。

一方、ヌクアロファのコロフォオウ地区の古い住宅地でも、1960年代に新たな住居問題が生じてきた。新しく移入してきた人の中には、古い住宅地に住む親族の敷地の中に伝統的なトンガ式家屋を何棟も建てて生活する人が出てきた。ところが、敷地の面積は限られていたので、過密感が居住者を苦しめるようになったのである。ヌクアロファ中心部の古い住宅地に住むインフォーマントの一人によれば、「助けを求めてきた親族を温かく受け入れるのは、トンガ人の伝統的な義務（ファトンギア〈fatongia〉）であるので、決して拒絶することはないが、多くの親族が狭い敷地に一緒に住むようになってからは、毎日の生活が息苦しくて、口論が急に増えていった」という。

新しい移入者の中には、また住居の確保に関して、第3の選択をする人もいた。それは、ヌクアロファの東部と西部に湾入しているラグーンを埋め立てるという方法である。当初、このような選択をする人は少なかったが、1970年代に入ると徐々に増えていった。さらに、1980年代には、少なからぬ数のヌクアロファの裕富な「ビジネスマン」が、これらのラグーンを埋め立て、そこにゲストハウスやナイトクラブを建てて、観光客を引き寄せるという事業に乗り出していった。その結果、ラグーンのかかなりの部分が失われることになった。しかし、問題はラグーンそれ自体の破壊ではなく、ラグーン

沿いに自生していたマングローブ林の消滅であった。かつてタコ、エビ、アナゴなど、豊かな魚介類の孵化と繁殖の場となっていたマングローブ林が失われたことで、これらのラングーンの魚介類が激減し、ヌクアロファの住民が安価で新鮮な魚介類を入手することが困難になったのである。また、ヌクアロファの住民は、砂の採取によって進行した浸食を防ぐために、1980年代末に行われたヴナ・ロード沿いの海岸の大規模な補強工事も、リーフの魚介類の急激な減少に結びついたと考えている。

ヌクアロファの東部と西部は、もう一つの深刻な問題を抱えている。それは、この地域に広がる湿地帯の上に建てられた不法建築群とこの湿地帯に不法に投棄されたゴミの山の問題である。この地域の住民の多くは、比較的最近になって（1980年代半ば以降）、ヌクアロファに流入してきた貧しい人々であり、日々湿気やゴミとの戦いが続く苦しい生活を余儀なくされている。かつてのトンガには、このような「スラム地区」がどこにも存在していなかったので、現代のトンガにおける大きな社会問題として国民の注目を集めている。

1980年代半ば以降、ヌクアロファへの人口集中は収まったが（1986年に2万1383名、1996年に2万1986名）、ヌクアロファの都市問題はより深刻の度を深めている。グローバリゼーションが進行する状況の中で、ヌクアロファにおいても貧富の格差が急速に増大し、海外での出稼ぎで豊かになった人々、あるいは日本へのカボチャの輸出で財を成した人々の車の列で、トンガ銀行の前の道路は終日渋滞するようになった。一方、商業地区の一画には、1980年代には見かけなかった「ホームレス」の人々が夜間屯するようになった。また、同じ地区のスーパーマーケットの前では、失業中の若者が陣取り、買い物客や観光客に金品を要求する光景が繰り返されている。ヌクアロファの閑静な住宅地においても、窃盗事件が多発し、トンガ政府高官の四輪駆動車が自宅の車庫から盗まれた事件（1991年）は、ヌクアロファの住民の耳目を聳動した。その後も治安の悪化は続いており、現在のヌクアロファは、かつてのような旅行者が安心して歩ける町ではなくなっている。さらに、警察大

臣パスポート不正売買事件の発覚（1987年）を端緒とする民主化運動の展開の中で、1991年には、トンガの歴史上初めて、支配層に蔓延する不正・腐敗・縁故主義と貧富の格差の増大に怒ったデモの隊列が王宮に押し寄せるといふ事件が起こり、トンガの権力者を震撼させた。

以上に述べたような種々の問題は、ヌクアロファ都市空間の表象に重大な変化を引き起こしたと言えるであろう。最大の変化は、ポートタウンとしてのヌクアロファが比較的最近まで維持していた中心性・超越性という客体化された表象が完全に破壊されてしまったという事実である。この中心性・超越性というヌクアロファ都市空間に関する表象は、G・マークスが指摘するように、権力者（王権・政府）と民衆という二つの対立する項を広義のキリスト教会が権力者をイデオロギー的に擁護しながら巧みに媒介するという構造の上に成立していた。しかしながら、今やキリスト教会、とりわけトンガ・カトリック教会は両者を調停する役割を放棄し、公然と王権・政府・警察を批判し始めたのである。この点は、有力なカトリック司教であったパテリシオ・フィナウの言動の中にはっきりとうかがうことができる。パテリシオ・フィナウは、民主化運動の過程の中で、社会正義の実現を求めるメッセージを発し続け、先述したヌクアロファ都市空間の周縁の湿地帯に住む人々の救済を呼びかけた。さらに、トンガ・カトリック教会の将来の行動計画においては、「非暴力主義と対話」が重要であることを説き、教会の役割を、「人々に同胞愛を説きながら、暴力を行使せず対話によって不正と闘うこと」であるとした（Mullins [1994] p.82）。また、現在のトンガの政治体制に関しては、民主化運動の展開過程の中で以下のような王権・政府を直撃する発言を行ったのであるが（Mullins [1994] pp.91-99）、これらの発言はかの権力者にとって、とりわけ耳の痛いものであったと思われる。

- (1) 首長と民衆の個人的関係、首長と民衆の相互関係、首長の父性と民衆の首長に対する信頼・尊敬がトンガの伝統的政治文化を特徴づける美点であったが、現在の政府と民衆の関係は、専ら金銭中心主義に基づくものとなり、両者の良き絆は失われた。

- (2) 今や、民衆は政治的に成熟しており、自己の尊厳が認められることを強く求めている。
- (3) ゴスペルに照らして完全であるために、我々は変化を恐れてはならない。変化の必要のない世界は、ただ一つ、神の住み給う世界だけであるのだから。
- (4) 警察大臣がパスポート不正売買の責任を求められたという事実は、彼らにとってショックであろうが、政府と民衆の新しい関係においては、それは良き責務となる。
- (5) 我々は、この件に関与する15名の不正者の名前を知る権利があるが、実際には、警察大臣が自ら疑惑、流言、恐怖をつくり出す事態が生じている。
- (6) 人間の世界のリーダーには、大きなリーダーと小さなリーダーの二つがある。小さなリーダーは、批判者を力で押さえつけ、すぐに報復を加える。一方、心が広く謙虚なリーダーもいる。彼らは批判を受け入れ、それを歓迎しさえする。トンガの場合、民衆の批判は聞き入れられないか無視されるかであるので、緊張感が高まってくるであろう。それは反乱につながるかも知れない。
- (7) 教会の役割は、人々によい変化の路を示すことである。この中には、新憲法の制定も含まれる。不正事件と闘うことが今求められているが、ある国のようにクーデターに頼ることは許されない。

以上に述べたようなトンガにおけるキリスト教会の姿勢の大きな転換のなかで、ヌクアロファの住民の多くは、自己の「貧しさ」と「従属性」を意識し、かつて抱いていた中心性・超越性というヌクアロファ都市空間に関する表象を、幻想として捨て去っていったのである。この点は、ヌクアロファ東部の湿地帯に住むインフォーマントの「警察は豊かな人々のためにあるということに今まで気がつかなかった」という言葉にはっきりとかがわれるであろう。このようにして、ヌクアロファは、中心性・超越性が支配する空間ではなく、相反する様々な利害が激突する空間となったのである。

〔注〕

- (1) これまで、モウンガモトウアへの世俗的権力の譲渡は、政治・軍事的な任務遂行の重圧を免れようとしたトゥイ・トンガによって自発的かつ平和的に行われたとする解釈が定説となっていた。しかし、キャンベル (I. C. Campbell) は、伝承構成の亀裂に注目することによってこのような定説に異を唱え、政治的、軍事的に台頭してきた首長、モウンガモトウアが自己の物理的な力を背景としてトゥイ・トンガの正当な権威を篡奪したことによって新王朝が成立したという解釈を提示している。
- (2) トゥイ・トンガの直系の子孫であるカラニヴァル氏からの聞き書き (1982年) による。
- (3) カラニヴァル氏からの聞き書き (1982年) による。
- (4) 今日、白人はバパランギ (Papalangi) と呼ばれているが、この語は、語源的にはタスマンの航海まで遡る。タスマンは、トンガ人が、彼の船を見て、“Ko e Vaka no papa langi” と叫んだことを記録し、それを「船が空からさっと現れた」と訳した (Gailey [1987] p.281)。一方、ビーグルホールは、この語は、異人のもたらした財 (とりわけ綿布とリネン) に由来すると主張した (Beaglehole [1969] Vol.3, p.178)。これに対して、ゲイリーは、この語は帆と積荷 (布や貴重品) によって特徴づけられる船が運んで来た布を意味するものであったという解釈を提示している (Gailey [1987] p.146)。ウィリアムソンは、サモアでは、白人が現れたとき、彼らと彼らの船が空を突き破って来たと考えられたので、白人は、バパランギ (天を切り裂いて来た人) と呼ばれたのだと述べている (Williamson [1933] Vol.1, p.90)。また、トケラウやウベアでも、「白人の船は空から来たのであり、彼らは神だ」と考えられていたという (Williamson [1933] Vol.1, p.93)。サモア、トケラウ、ウベアとトンガとの密接な交流およびポリネシア語の同質性を考慮するならば、トンガ人だけが、最初から帆と積荷によって特徴づけられる船が運んで来た布という意味でバパランギという語を使ったとは思えない。タスマンが記録しているように、トンガにおいても、バパランギの原義は空からさっと現れた船であり、非日常性、超自然性、両義性といったコノテーションをもった語であったと考えられる。このようなバパランギの意味は、クックの時代まで存続したと思われる。しかしその後、バパランギの意味も、18世紀末のヨーロッパ人との持続的な接触のなかで「カテゴリー機能の再評価」を受け、厳しく交渉すべき交易相手に変わっていった。
- (5) 馬上のペインがすれ違ったトンガ人女性の衣服に泥を撥ねた一件に対して、ヌクアロファの裁判所はペインに8シリングの罰金の支払いを命じたが、ペインは笑い飛ばして無視したという (Rutherford [1971] p.50)
- (6) ゴドフロイ・ウント・ゾーンの太平洋地域の本部は、サモアのポートタウン

として有名なアピアに置かれていた。

- (7) ハハケ地区K村に住む貴族ヌクからの聞き書き (1982年) による。
- (8) ハハケ地区N村に住むレカ氏からの聞き書き (1974年) による。
- (9) ハハケ地区N村に住む長老, レカ氏からの聞き書き (1974年) による。
- (10) トウボウ・コレッジにおける校長からの聞き書き (1988年) による。
- (11) ここでの数値は, *Tonga Population Census* の1966年版, 1976年版, 1986年版, 1996年版による。

〔参考文献〕

- Amos [1854] *Wesleyan Methodist Magazine*, London.
- Beaglehole, E. [1957] *Social Change in the South Pacific*, London: Allen and Unwin.
- Campbell, I. C. [1992] *Island Kingdom: Tonga Ancient & Modern*, Christchurch: Canterbury University Press.
- Cook, J. [1777] *A Voyage towards the South Pole and round the World*, 2nd ed., Vol.1, London.
- [1784] *A Voyage to the Pacific Ocean*, 3 vols, London.
- Firth, R. [1957] *We, The Tikopia*, 2nd ed., London: Allen and Unwin.
- [1959] *Social Change in Tikopia*, London: Allen and Unwin.
- Gailey, Christine Ward [1987] *Kinship to Kingship: Gender Hierarchy and State Formation in the Tongan Islands*, Austin: University of Texas Press.
- Garrett John [1992] *Footsteps in the Sea*, Suva: Institute of Pacific Studies.
- Gifford, E. Winslow [1924] "Euro-American Acculturation in Tonga," *Journal of the Polynesian Society*, Vol.33.
- [1929] "Tongan Society," *Bishop Museum Bulletin*, Vol.61.
- Glimshaw, B. [1907] *In the Strange South Seas*, London: Hutchinson & Co.
- Howard, A. and R. Borofsky [1989] *Developments in Polynesian Ethnology*, Honolulu: University of Hawaii Press.
- Labillardiere, M. [1802] *An Account of a Voyage in Search of La Perouse*, Vol.2, London.
- Latukefu Sione [1974] *Church and State in Tonga*, Canberra: Australian National University Press.
- Marcus George E. [1980] *The Nobility and the Chiefly Tradition in Modern Tonga*, Wellington: Polynesian Society Inc.
- Mariner, W. [1827] *An Account of the Natives of the Tongan Islands*,

- compiled by John Martin, Edinburgh: John Constable.
- Maude, H. E. [1968] *Of Islands and Men-Studies in Pacific History*, Melbourne: Oxford University Press.
- McCreary, J. R. [1977] "Urbanization in the South Pacific," *Living in Town*, Suva: University of the South Pacific.
- McKern, W. C. [1929] *Archaeology of Tonga*, Bishop Museum Bulletin 60, Honolulu: Bishop Museum.
- Mullins, David [1994] *He Spoke the Truth in Love*, Auckland: Catholic Publication Centre.
- New Zealand Advertiser* [1865] 19 June, Auckland.
- Oliver, D. L. [1951] *The Pacific Islands*, Cambridge: Harvard University Press.
- Poulsen, J. [1987] *Early Tongan Prehistory*, Canberra: Research School of Pacific Studies, Australian National University.
- Rutherford, Noel [1971] *Shirley Baker and the King of Tonga*, Melbourne: Oxford University Press.
- [1977] "George Tupou I and Shirley Baker," Noel Rusherford ed., *Friendly Islands*, Melbourne: Oxford University Press, pp.154-172.
- Spoehr, A. [1960] "Port Town and Hinterland in the Pacific Islands," *American Anthropologist*, Vol.62, pp.582-592.
- Stanner, W. E. H. [1953] *The South Seas in Transition*, Sydney: Australian Publishing Company.
- Thomas, J. [1849] *Journal*, microfilm reels, Canberra: National Library of Australia.
- Thomas, Nicholas [1989] *Out of Time: History and Evolution in Anthropological Discourse*, Cambridge: Cambridge University Press.
- [1990] *Marquesan Societies: Inequality and Political Transformation in Eastern Polynesia*, Oxford: Oxford University Press.
- Tonga Government [1966] *Tonga Population Census*, Nuku'alofa: Statistics Department.
- [1976] *Tonga Population Census*, Nuku'alofa: Statistics Department.
- [1986] *Tonga Population Census*, Nuku'alofa: Statistics Department.
- [1996] *Tonga Population Census*, Nuku'alofa: Statistics Department.
- Walsh, A. C. [1972] *Nuku'alofa: A Study of Urban Life in The Pacific Islands*, Wellington: Reed Education.
- Williamson, Robert W. [1933], *Religious and Cosmic Beliefs of Central Polynesia*, Cambridge: Cambridge University Press.